

OP12-4 p-N 因子別にみた術前化学療法の外科治療成績

¹自治医科大学大宮医療センター, ²自治医科大学呼吸器外科

遠藤 俊輔¹, 坪地 宏嘉¹, 大谷 真一², 手塚 憲志²,
手塚 康裕², 長谷川 剛², 佐藤 幸夫², 塚田 博², 村山 史雄²,
蘇原 泰則²

【背景・目的】近年、肺癌に対する術前化学療法は進行例だけでなく、切除可能だが予後不良な比較的早期の症例に対しても行われようになった。どの進行度の肺癌症例に術前化学療法が効果的かを探るため、当科において術前化学療法後完全切除し得た肺癌症例の治療成績をpN因子による進行度に応じて検討した。【対象】1994～2000年までの自治医大呼吸器外科グループ（栃木本院と大宮分院）において、臨床病期III期で術前化学療法を施行後、完全切除し得た非小細胞肺癌73例（M/F:59/14）平均62歳を対象とした。臨床病期は全例画像所見により決定した。組織型は扁平上皮癌38例、腺癌30例であった。プラチナを中心とした化学療法を平均1.4サイクル施行した。放射線を併用した8症例は除外した。化学療法の効果はCR:0例、PR:21例で奏効率29%であった。術後5年間全例追跡した。【結果】pN因子別の5年生存率はpN0（30例）:90%、pN1（14例）:57%、pN2（21例）:33%、pN3（8例）:0%であった。同時期に手術単独で完全切除し得た症例の5年生存率はpN0（130例）:71%、pN1（32例）:54%、pN2（49例）:42%、pN3（4例）:0%であった。術前化学療法を施行したpN0症例（30例）と手術単独で治療した臨床病期III期-pN0症例（34例）との2群間の検定では、両群に性別、年齢、組織型、腫瘍マーカー、T因子などに差がないものの5年生存率は90% vs 68%と術前化学療法を施行したpN0症例の方が有意に良好であった（ $p = 0.0025$ ）。【結語】pN0症例が化療以前からリンパ節転移がなかったものと仮定した場合、リンパ節転移のない症例に術前化学療法の効果が期待できることが示唆された。